

心をつないで守る消防団

私の父は、地域を守る消防団員です。運送業の仕事で、毎朝五時半には出勤します。県外遠くへ出張もあり、両立は大変なのにいつも「たいしたことはしていないよ。」と謙遜し、家族を安心させて頑張り続ける人です。夕方早く帰った時や休日も消防団員として危険箇所や重要水防箇所の巡視に向かいます。物が燃え、他に移り炎が出やすい「かまど」の点検やポンプ小屋の掃除、年末年始の消防特別警戒など、一年を通して活躍しています。また、消防団の仲間と宮城県消防操法大会に挑戦するなど、切磋琢磨し合う時もあります。

幼い頃は、野球好きな私とキャッチボールをして遊んでくれた父ですが、消防団の演習や防災訓練はとでも重視し、一生懸命やっています。私は、全力で命に関わる事態に備える覚悟がある父を、心から尊敬しています。

父が消防団員になったきっかけは、近所の人からの誘いでした。父は実際に自宅の火事を経験し、かつて地域の消防団に助けてもらいました。大変お世話になって、自分も地域のために何か役に立ちたいと決意したそうです。

また、昨年近所で「かまど」からの火災が原因で大火事がありました。父は消防団員として現場に出動し、ものすごい火の勢いと熱さを感じ、「火事は、絶対に起こしてはいけない！」と強く思ったと言います。そして、火が消えても、消防署の方と父たち消防団員

は交替で現場に待機し、協力しつつ再び火が出ないように見守っていました。その時も、地域の皆さんが安心できるように声を掛け、被災者の皆さんを励ましていたと思います。

私は父の安全や健康面が心配で、久しぶりにゆっくり話をしてみました。「お父さん、消防団大変だね。辞めないの？」すると、父は「どうしても消防団のイメージは大変ということもあり、入団する人が少ない現状なんだ。少人数の活動だと、一人にかかる負担が大きい。若い人や女性の方々も加入していただき、自然豊かで住みやすい登米市を次世代へとつなげていきたいな。そのためにも火災がないように地域の人とコミュニケーションをとって、声掛けをしていきたいと思うよ。仕事との両立も連日の訓練も大変。だけど、それ以上にいろんな人と関わることもできるんだ。それはとても充実しているよ。お父さんは、できる範囲で活動に参加して、少しでも地域に貢献できることが、嬉しいんだな。」私は、父の揺るぎない言葉は、努力してきた人だからこそ言える思いだと気付きました。

父は任務を果たし、消防団員の団結力を感じた時、大きなやりがいや喜びを持てると言います。そんな父に、私は安全第一でずっと消防団員を続けてほしいです。そして、私も将来は救命救急の場では人々を守り助けられる消防士になりたいです。専門的なことを学び、中心となって地域の消防団と共に連携して、防火防災に努める人の輪を広げていきます。

